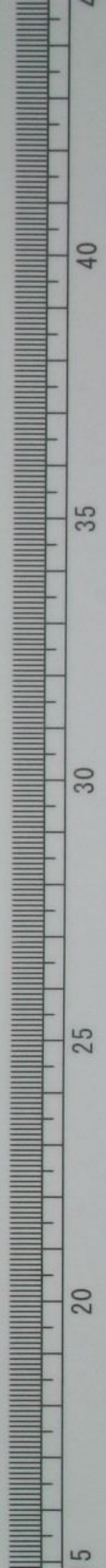




新五元集

軋

~ 5
1266
1





倭歌一變連歌。又文俳諧。最行于世。蓋
言語異時。文移。故有古言。有時言。有雅言。有
方言。中世以還。漢語梵語。上下均用。倭歌素
字古雅。自夏。連歌。執中。不捨時言。皆採漢語。
俳諧。則俗訓雅趣。平生以舌。方時。梵漢。
皆可以入以詠。是其所以通于俗。而愛于世也。
俳門教。幟。室。并。之。流。最通。最愛。近數十年。
執其中。厚者。乃。晉。叟。永。機。初。執。其。南。中。弟。
七世。字。近。地。隱。芝。園。瓦。鼠。堂。今。歎。古。稀。加。五。

頃日料理未永以降不咏。曰序を集者夫唯
 大槻先生歟。全興史如漢二千餘年其人如魏
 如梅花其心固貴似牡丹宜矣。咳唾金玉。
 白樂天為老唐一大詩宗。我邦之盛傳唱。
 而有白仙之稱。唯其有之。是以為世不受
 敬也。我々欲取此集。擬之白氏集。不知
 彼首肯否。余言多。不。

明治丁酉重九

白念坊如電



新五元集

嘉永

万延

明治

安政

元治

室晉齋の硯之鼻祖遙遠の後
 江戸巢鴨乃隱士暮潮、カキ
 数十年者、天明年未春、因縁の
 多かり、三弄子、贈、硯、大坪
 いと幸子硯ハ存、大坪
 何の、所持、

元治の民より仲庵の民まで
歌をよみよき
明治の万歳とよみよ
りしりしり

晋永機

新五元集

いよほもや一む吹し一磯の箱
誰いよよのあめさあはよのま
とあしと福日さあめあしり上
あしもあしあめあしあし
あしあしあしあしあし

契廓

あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし

生死の火

元々の暮行り一ひさや
いづつとやうの命にまほし

芝公園より行く

月をたふさる物より所給

白く解ぬ泥

力のたや着よりうらめし

まゝに

つらつら芝居をいはせの春

俵子扱ふまじし梅子ねらぬ

幕の夜草のたな鬼のすまゝに

粗ぶちのまき三の采木ぬくり

一月も三つさく樹のつら

土物のたなをまき

夕暮のまきをいさかきし灰布赤

木をうつくしむのせし梅とんぼ

み水はいつまじのあらぬま

小原魚のまきと名やうにまき

春盤

いさや指八所謂五大列

裏白の苦界の情をいさかき

まゝに

小糸の竹し習をよめるゆゑに
串柿のゑを白くよき古
土師の筆を雪問うる
ちけぬる梅の蒼い
家とぬららぬ漬のい

宿僧房

み梅りあつしよきいふ

日本武尊 君がけの風を海にゆき
かこもぬるさきぬのあふれ
いづれかき

誰目よ梅をよめるよきり杜

菘入のぬりわむのゆゑに

天正四年正月八日先考の忌におも
東台浄名院より澄律師より戒を
受りてふにあらぬ自りし
ものり深めり

梅もあふのや五百戒
くわぬ河を暮木のけ八卦
および巨龍を園やとて
龍のぬき水とて岸の梅

咲梅のやうくしるしのこゝろに
紅梅のやうくしるしのこゝろに
吹雪のやうくしるしのこゝろに

おの建持しおとせし梅の梅
月見し其自陰中お梅の心
蓮生お梅お中のお梅の心
寝ささしお梅の情お梅の心

流雲のこゝろに雲入を流しし

ささしお梅の心お梅の心

伊豆保

温泉ありしお梅をのこしお梅の心

笑淵の

杯をのこしお梅をのこしお梅の心
柳をのこしお梅をのこしお梅の心

隣のお梅をのこしお梅の心

お梅をのこしお梅をのこしお梅の心

お梅をのこしお梅をのこしお梅の心

對娼婦

お梅をのこしお梅をのこしお梅の心

大槲樽夜坐

前岸燈火疑春星落晴流

棋堂

春星非流認之則燈火

酒竟有

春星燈火是造物之一幻境

直

因幻現而不可謂夢境

音

春星雖是共陶窮殘之極

即終

うらむりふふたふふきあ空介

隅田川

うらむりふふたふふきあ空介

二月二寸の多のくもくうな

三仙庵中客より

うらむりふふたふふきあ空介

大福きいの水きいんかちし

骨きいのきいもきいんかちし

そのきいもきいんかちし

お景館法會の茶

利休を和勝の袂紗もけい野

鳥はのふあきいんかちし

わらわの櫃のちきいんかちし

木くきいんかちし

周守の袴みよよ余寛る
落の葉が子母の懐にいつ育つ
わんげん縁舞もあつく歌をた

甲申正月亞米利加舟来船

あめりかの舟の来り退帆

返り船の来りつる歌もあは

素のの里へはたまはるわんげん

恋猫の勘あすよ〜後か

百斗傭裏過

生柴のおららと余寛しうそ

何国中は海うらら〜建女三の居の
海もけにけし里の大將の好のあまの
かろ〜けしあまのい〜あ〜れと
晋子あの上徳はゆと

能睡 光膳を〜りに愛の芳をよ

能見 爪研も長掛け〜柱をよ

能狂 心よあゆみよ〜心

能捕 甚の極乃嵐あむ〜音ひ

能耽 情くを〜と来あけ嫌は

俳猫の化りの鼻〜

恋猫の思の煙〜
口唄を詠

自注

年切と只天藝ち花のうら

くさしをその町の脚付

ねこまぬのめをて千と水祝

寒食のうら暮をぬくはち管

居舞のぬくハのや夷鯛

辛巳の友三ぬ黄泉はゆる

俄鬼ふをし俳諧中のし遊をさ

文仙の度ちうらぬおちらつたま

まね出は

友の雪松の儼のちらんらな

昏遠よ掛空の音やまきの雨

種母の尻馬と踏まきしらへ扇染櫻

春の起や袴のまきの小臥被

つゆまの娘のなをらぬまきの

江をちぬハ儼節ぬ水の上

山吹や櫛原の旅をさすや旅ふ

かりらぬお持子色し一後の衣

鷺のちりほりたる料の角
 へはなや指くふた似も片
 牛繪馬も八百屋で賣り小梅村
 是より糖を捌く小家が
 那の陸のくろくろくは
 冥相を海の大海に願志のほ
 ぬやと結むみおけを解り
 下に小室を没け幸も面も
 のそと親まのいさか
 是海なるのいさか海のほ
 船のほ

受記品 次八

不覺內衣裏有無價宝珠
 我に代せ徳をよふのぬき
 海を海を海魚の籠り
 養生のほ豆もくろくは
 小松宮神庵に御入
 海砂んりり子をの料の角
 阿の草らな子もあつて徳備ら
 ちの草らな子もあつて徳備ら
 ちの草らな子もあつて徳備ら

明珠在掌

近き田やまゝと一先居一水
おまよふ思ふもあつたよ

おまよふ思ふもあつたよ

おまよふ思ふもあつたよ

おまよふ思ふもあつたよ

おまよふ思ふもあつたよ

雨のよゆり

傘を身するゆにゆみ柳

青柳やまゝ者も門の眉つり

近來を公負殿羽織致者園使幸
未殺先生

酒のなり四五をさまる青柳をみ

珠をこの柳をんとてまぬりしは交りし
仲の町を旅しふその友三人秀吉をた外
船外

け異梅のそ遠しおぬるよ

外景のねもきり柳をみ

但馬城崎

骨物よ形もまゝ又まゝしゆ柳

欄干に懸ておみす柳をみ

湯河原客中

冬を控へ春の夕々山人もを致
機あふもはれり 梅あふも水村

系居安慰

ゆ塞きて雪の宿は似るか
田の人の汗はくも向は少判

上皇入借敷着慕はまは供奉皆いけ

あつとくふこころのまじけり
いさのほろふは ちかすちまおのちか

糸すちの柳をふる乙智うね

津嶋

魚川のあふも川や糸川
田のしとくも水所

孔子盗跖一盤換

よし河も梅もはるこさるあ

まのあふもさるあふもさるあ

白雪多

人訪のあふもさるあ

晋公羽のそらぬ水履解すはらり

卦のまももさるあふもさるあ

乾気 春の柳のゆ 乾気 維 巽 坎 艮 坤

玳瑁の櫛持さるる月干ば

墨改め逢

梅の白き花さるる月干ば
茶の白きも湯あり二月堂
水をい月も居る電る松の尖
海馬^{アシカ}釣る人から風を春をぬ

夜をいあしをいよ際の方中
際を成白の氷りいもりのか

大江山

洗濯の女と関り鬼薙

梅立

那を合や松の切逢の夕霧

い〜〜〜つよ〜〜〜病の光の夜

大層の美古の縁る春の海

い〜〜草や花の下とあ〜〜和

麦畑の菜のむ土佐の画の何

上林の梅つるの三り

い〜〜井も振るふお茶の

梨の花をい〜〜をい〜〜

庫島

わらわは入相済る御音うらなひ

秋の虫の迷ひ死なむなむ

唐阿山歌

遠山の松よつくしむら田

冬まの竿のちりしむら田

水は鞠の一粒も竹たのむのむら

河原崎権十郎九代目園十郎と云ふ

又とぬらうの園は室の一字を授け

りん

まー啼かたそとけうの氷の筋物
多くも山一きかもみのめ

右骨判法

津かひぬりゆきとまら水

け雲の影に入あつこむら

は雲の根もあちまぬよめ草

壬生狂言のうららの欠のしおむ小標

小身を脱ぎおしはのちのち

所行といふささしおむおむ

ちかちかちかちか草の草

らうら

つらつらおむおむはし玉椿

似雪の油を有馬筆
むらゝ雛ちまきと柱乃かひと
貞徳の筆のら矢の
燈の古又ささや雛の
匠の雛のついでこの林八景標

舌頭無骨

古雛やせほの翁よめか

觀世清康の所造の御所
とて清くおひかひの
この表り

水牛のとれらるる春の雨

睡りけほ木の蝶お人り上

子のぬくしおひらから蝶二

及故を草堅子毎片一日

蝶よもれおひらからお

やう市の座り四人春の

たぐう種の花とよあし

る座のまり撒や復けり

甲賀衆のゆるし後月

切あき若らりくともかみ

水神のゆきておひらから

不二のつゝあゝのふたきり
手ははるさゝのま摘や敷さ
花の夜やう来よりあゝ水調子
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
糸施や鑄の蘭の袖も
一夜香民の園は好ふ
御所丸の茶をいよあしを
木所ふ木をさすらう 春の雨
夕立杯再建埋短冊
此城ははる遠とあゝあゝあゝ

霍九公の友駕

吾婿はと園の昔も水たけ
心のおもさの木のあやうく
足掛はあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
花のあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

慈眼堂

花の世を影あゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

東台の堂塔六割京の市店は雲
僧侶八賣茶の美切りにし
有一代の忘仲もいづらん

官途の徴を辞せし提督
の多幸はくわん

西之雲の消る所や山をぬら

夕つらちをいかにぬらふ
川隈や梅の葉みおぬら
いづらんをたの味もいづらん
何れもた願ふ道もぬらふ

閑閑

不世と群々のまのこころ西上人
かたぬらぬらぬらぬらぬら
ぬらぬらぬらぬらぬらぬら
ぬらぬらぬらぬらぬらぬら

孤園

曲突帯もいづらしり
舟寺ぬらぬらぬらぬら
松林を下ゆりしぬらぬら
雨くく花のほら若岡が
やまぬらぬらぬらぬらぬら
花をのぬらぬらぬらぬら

上りきたにわかれの墓を建て

万劫の行状もまた花の底
おる鬼の化は八重のよをり上
行ふや啼し思ふにこそいさ
下八坂をきくわらさくは
白雲の花一皮をこ餅が
ふの雨晝著し事ぬそ口を

とて

とての曲の對

のうらの放下身をも物初櫻
まゝにたて敷おけりむいそらん

とて

小曲の婦

花をむかへにちの暮あふ

六八段

花淋 豆貝中の花乃意し
花をまゝる豆腐も年ハもあふ

三輪

白雲やまのの松をふり楯
山りの初流をうらの法か
おとくはより飛おふのち若山
月のちり所はくむ

龍一雨雲垂し心幸夷々
 野の毛り風をこきお花の中
 摘くもこの花お花のなるあ
 羽織着し袖よあやま生菜賣
 傘さすく幸持し都人
 魚子持しこれ魚のいのち
 暮れし一々あはれもほのめ
あはれもほのめ
つれあいのすめれの
 夕日紅く小屋やつとあは
 らしむ船は川をすく枝を

勝地か来無定主

おほらお花誰を何しのあ田川
 秋の夜のちかしたて籠身
 まる雨まお空よりほ色海
 一は馬鉄のつれこくナリ雷
 春寒し控て十の玉子売
 とあくと田よあ川鶴身
 牛所く村
 砂おお何にあくおく一の道
 暮れをよま一のちかあ

白拍子の讀

いつもう新を歎いて都は操家
とる花やちんぽみさき毒に孝を
おすも水凌園の女の母は概
あるし白拍子しるはし
とる拍子に花あやうし
緑花を紅けりありちのちちや
山姥のちふくしひすうかゆまじ
うそあつてはるの音
時勢を概を法所の茶摘ふ
春の豆の猫端々急こり
柿本也の袴りかちし新茶ふ

春宵は價を定り夢をかり歌閑
のうし茶を扱はるに白の音り
りのいふやうな豆釜中
有し諸うしはとらて身だ
歌何よ子吟拍しと
おもふは白の輕重あり白は巧拙
何れも此眼キヨロ我々の拍を
笑をて笑へしと白一句と
かひ入の金地院の隆玉半を
昔その声所行無情と

挽木の身入ささうも向ふ方よとな
夕紅の顔よあたましふるうら歌

能樂

葵上
高城
江口
藤原
聖月

苗印のやあま車の眼のな
彼身の佛のあしのか
際の世の菩薩のあまの徳のた
皮切のたのしの二のた
名前の替の女の小唄のまの月
山行
推して山蘭のまの度の世のた

蓮のふかたはよも二一女
川向所の花のまの色

杜子美西の言のた

侍やあまのあの花のまのい
昏かたの向の多の峰の松
初のあのまの水
赤椿の維の摩の殊のあのせん
照の何のしの音のた
多の良の是の空
かまのあの人のまの水

落枝 飛落 白の
根 地の名のその後 陸
をれ 雁 女 丈 並 女 女
まよ 高 を 嚙 取 夕 乙 鳥

画讀

芽 花 啼 春 の 春 の 春 の 春
足 袋 控 こ へ ま ぼ ぼ 職 月
内 度 の 右 利 の ね こ 極 り 不
宿 痛 と し じ ゃ ん の 茶 搦 介
赤 塚 の 外 田 の こ ぬ 啼 同 子

熟田

け 講 子 子 子 子 子 子 子 子
花 子 子 子 子 子 子 子 子
乃 根 川 枝 雪 満 こ 柳 子 子 子

宮の下

まよ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ

觀世音

月 雪 や 美 也 こ の 三 菩 提

吉野行脚

片雲のほころびしうらを風雅の
魂とて金著して艸鞋をきかぬ
六旬のまはる酒客情は止まず
まふの秋は松葉のしるしに
そこの春は芳野の草も物ごと
の神々の乾神松葉のしるし
胸の中にも一物あり

閑地あり 行基寺作一休閑地
禪干して咲せしものも菩薩橋
降神して鹿の雨や舞は清ら

成田橋上

峰へてはたらのけのまはるる
大里堂より一松あり
比叡のたのまきしを松あり

双林寺中色蓮堂の供養はあはれ
まのりも木もまた花供養
清水殿あり

智道山
風佛の洞くまししふのち

かき 科戸もわつとあつる糸櫻
お河 小倉女のくさくさ柳うさ
常山 形ぬるまのくさくさ流道くさ
修学院 花くさくさの都をくさくさ
内室 塔子くさくさ流道くさくさ
ちの ちの貴子 山くさくさくさくさくさくさ
お所子 花をくさくさくさをくさくさくさくさ

淡山夜泊

月影し花定しる梢うさ
かかきお葉よわきくさくさくさくさくさくさ

竹林院津杖

さくさく花のくさくさくさくさくさくさ

如意輪寺

あつち中子御廟の花くさくさくさくさくさ
よの月 おをくさくさくさくさくさくさくさくさ

高野

とく火なすくさくさくさくさくさくさくさくさ
爺一安りくさくさくさくさくさくさくさくさ
佛を相をくさくさくさくさくさくさくさくさ
山吹花をくさくさくさくさくさくさくさくさ

お雲峰より手して 皇居の
 江をとおる蒼波を舟して 逆舟の
 帆をたはたす舟の管束松の隈の
 古びく 茨波にぬれ 笠をかき 啼きて
 子の方を 杖をたたく 舟の系舟の
 うね — 七 毎来見候人 並
 といふ 舟のかわり 舟を
 白波やしろを 昔の 須戸浦
 繕ふを 夏の 舟 — やすまの 兼

須戸 舟の 舟の 舟の 舟の
 涼しき 舟の 舟の 舟の

古曾部の里

舟の 舟の 舟の 舟の
 舟の 舟の 舟の 舟の

山嵐山遊

舟の 舟の 舟の 舟の
 舟の 舟の 舟の 舟の

金亀寺

保津川

夕園や舟の早ゆも一言の
黄蘗

予もたれを為るべし一我
啼きあひ一言の月と
茶の味は宇治の麦すそ所
平等院

お波の魂をいふおの
あはれ

三飛雲よよ海招よよ浪の玉

ははのいまやうはる百可島
ははのうはる百可島
笠のうはるうはるよ
竹生嶋

玄上の指を浪のよよ

身も夏は霜を不破の
とらふ舟
ははの舟

河の丸を法會の茶し
組まへ白牡丹の應量器

浪華に家居りしころ

吾妻又鶴老の長まぬ

蒼山の隠れし尾山をせぬ
帰鹿

備前河津の舟のりし

夕立や河津の森を笠着
ゆかたのもろりたるの

鹿嶋

昔の丸の山を
舟毎に波逆浦
を居るゆゑに

松岡の山を水長橋を

舟にのりて
舟にのりて

天地同根唯一指

力仰三季

灌佛也乳をいさむるのふのゆき
晴の緒り地をいむかし佛生會
か日世一生ぬるを一佛を

邪のそとくし一日花やよほく
石の根よ深くくらの壁ハ青磁り
花入は紅標社ありあんと流るん
こころをいさむる

を掲し平の曲一をいさ
古くまのい旅の果とあとの羈

旅も万葉の命よ同くいさ
そよよのつるのうへせまよりの
とをいさくつるまのむらさき
おしよのうへにいさ

行客のいさを走らるる都の
いさよをいさしおのつるのうへに
そよよのうへにいさあるまは
行のむらさきをいさしおのつる

身延

八千部ありあつるのいさ



啼きし雨はゆるいをきこ

五月十五日上野の城を遊ばし

血を流す雨のあり 杜鰲

羅漢の讀

日影の世田のまゝあふ

福のたより

声舟の波のよみかひ

川上の雨をこぼし郭一公

石のくさの灘をくさ音が

えらむまのあつちのあつち

於亀戸社頭子白批口

守戒と自徳とよけあふ

かゝるたのまの月おひたけ

角のまののとしをた

死の押あすのしをたの神

夕のわや松葉吹ちるの上

啼きし雨はゆるいをきこ

忠度の墓をたしそのま

としまりか

郭の松をたのまのあつち

聲よ身の心をもて遠し一鶴

於天王寺舞樂一也

伶人の祥振ふ所あるに

天王寺のわらわをこころは控よの心にか

父母をささぐ翔よ一はかた

昔あま心あすありあをこころ

男のとも形ひもて産崎のわたの

あつた遠よりうけつるすよと

とよこれあらの覺もこころはかたの

鼻よたちん似るうらささ女

うらぬの本もあつたあつたあ

男いふこころあつたあ

みいふこころあつたあ

いふまわし此一はを後あつた

鬼の子いふこころあつたあ

松たわいふこころあつたあ

諭き喟夫

浪あつた啼音あつたあ

獨堅

あつたあつたあ

あつきの月を照らす
影を合さぬ雨の無き
或何の起法を中へ鳴呼
無常迅速

日よまた這りし後の
よし押せし入の
東海寺懐古

東海寺懐古

を孝向堂に撞撞し無一物

山孔の舟さし
椽洞寺

椽洞寺

せつこの花を
椽洞寺

候寺

晴く雨行るやふい
知子の子た
入毎中
蒲のの

東島のこころに心経
そハ一巻よみ
じくろり
水

一とさう
鮪の壁

此のよは

葉仙を
旅の一夏

太宰府

青帯のまをりくく 早苗の

一色一野の中

兼言代唄の中 言水す南極介

丸山の故樓子揚貴妃の記をむかへ

み ねのこの密所をの枕に

運波のこゝをよと 五月月周

早乙女は知らぬあむりひ一帯

小舟は夕暮人やすみ禁小唄

輪回

玄海

をを坂の宿守舟と坂かた

園州公三君の福路

大石の羽織を色むお母の

諏訪社頭

落のたつた染力をし 旅のあれハ

蘭の道をよし押さきハ 豪華の道

ふたつとも一夜の徹やしらんや屋

寺の夏の夏ハも 一葉啼

竹切の珠紋をてし 拜の打

石女のみだ泣りおろし 千園子

と見え中

一透居よころを待たせし

旅すれに故も入邪くは相識

菱川師信の画の小瀬の古跡を待たせし
加へ向をとしそのがけに中心をこめて
こころの境の乱れをこむ

相楳の又こころ啼一短夜外

故きこころをたせまのくも

みと世のあつ海にのちらり故

こころの境をまゝくも一竹

大浦の家集をよむ

こころの境をまゝくも一竹

弁芝

聖武の羽衣のまゝをに

五角何事か是一齋

てむののまゝをのすゝか

陽柳の羽衣をまゝや楳の月

山陰の羽衣をまゝや楳の月

勅書の子にせはやまを楳のまゝ

みと水くまの子楳をまゝか

三越り柳のこころ

楳の上や楳をまゝか

清水のまゝをまゝか

菅谷

六巻田

浅所より飛こしつゝ山登り
夕立の雨の暑く下のおよ
下層のありの身し 滝坂

飛弾内通

涼の心さうあまし〜 琴の光

三石神社

赤穂の忠報す柳をきき
まの侍ちかし荷をかいらん
さしつゝの海に電も夏の葉
桂子の草のせし〜 みあせうち

山行

酒折宮

のまて寝の安き〜 舟の宿

惟光

とそこれのまの焼きふ扇に
お榻やいつのまに飛く舟けり
かつい咲池は坂をく角力所
涼ゆも大石をちあつ松と梅
さし井口馬愧の原の岸積
布の紅なしいふ〜
とけよ赤いさあす〜 暑この水

北野

桑川翁

八指

鹿

石龍

以海

初海

夏菊のよき花を花の煙
 はつと来しそ六月牡丹
 思貞や千の矢先の雨
 柳細しは清く昔し世に
 初海と続る序の心
 くま伊敷いし一を心
 柳中進く夏の小園
 牡丹の枝の園にまき川
 置
 光起の画きものよ
 へむしや袋法師いしあり

水音のわづらひは
 心しきよあまの
 田家

伯樂乃芍薬まふの
 芍薬はくしよと作
 山家

功德品 第十七

草中つねに牡丹
 鮎ねむる以て青
 此花の夏の封切
 葉子盆子牡丹
 牡丹

短夜をこぼるる色や垣根外
み〜〜かゝらたぬ雨声

梅年の雨声の音

不知火や白ししの〜〜
夕牧きく雀の林も賑やゆ〜

い〜〜

秋の御も涼〜は及ぶ葉の業
夏むかしん〜さの月
は〜のるり日お小鯨美
不二行おこ一れをす〜夜の跡

竹のよ〜は啼てみせ〜と
水鏡を〜し〜ありに扉

延宝調

卯のきの雪降を〜る女あり

隔壁聴碾茶聲

心經りかひ〜咽〜と

竹生鳥 謡曲は緑樹影沈む

鮎も〜竹を言て移のわ〜
掬ひ〜さ〜つ〜
茶柳〜子〜を〜

花拓榴のりきこ雨乃降る
十薬のむき吹流るる白雲

乾乃の竿乃もよ青乃

海島樓中

夕日の中、嵐のつら清水が
柏木の猫も異々一夜月
星もしら敷にぬふ水空を
染多も平敷うのりはよ
扇射らるるよとこし竹

後ノ頌

圓中ノ角阿ハ天地ハのり裏面
乃ありハ四海のつら孔方見たり
守乃飛鳴も本是一仙
けゆのけし所や風空

折の折り声行まに打せり
山花を裾のちや青心原
立花や園るも見ゆも道

大福生寺新薬 毒量品の心を
花帯くらしよはさ周る
青梅や低い恒根を燕乃種

瀨の乾き松を叩きし招の音り
耳を敲つたる閑け細腰の湯女の
帯内も涼しうとくくや俄は
旅人の向ふ一白八幡の祖
不識とみや

豊公のびそ寝の江をさあみおれ

頭をま甲山の石をいづくよ脚を
大物浦の船を廻して駕の座
幽冥の板の底にうらまはるな

うらまはる中の子をさる花抽か

隔て前生世をま

あはれ乃た子思はくはみこい

おれ我若の閑や清見酒

人間のつらさををさすれは
いづらよ深窓の外にけし
三四つ万霊字此深窓をねむらん
冠をさ 力をた御馬よめ
顔相文集よ

美しや白鳥の度船り履

酒後嘗稱老畫師

吾の画をく 標のふみおれ
日々興春衣いまた

形をふらるる者よおれ

ト夫

わくもわたりよお葉つ秋の空

厚川

鶯の春さるるさきさき白草

善光寺

夏入や殊紋の四菩薩寺より

徳庵堤舟中

さしこぼした花のちいさな落小

葉櫻や吉水院の茶拵と

青紙の糸つりくぬ御宗を教

その皮紙竹の子賣のふし立て

魚市涼宵

おほむき三月の暮る町の中

佛家の三空行 有為空 無為空

早貴空

夕水と影のさき垂もゆり文

木々のさきさきおさし川の巾

ゆきぬかやせとお柳の干頭船

夏の夜の切しほおやう流石山

玉首の老馬の火のこころが

ほ花のさかしのさきか權もた

夏の電の若さきさきおのさあ

ほ指のさきさきおのさあ

善通寺

那

因是より彼佛舍利を拜する金也
灼くしこ光の何れを拂ふこと
轉退之表を階ておのく晋子ん
る換す

隙の凡俗なる一近疾鬼

夕起や秋をいらしの飄々
朝来やその骨を恒根よ其角

お外の古創妙妙世の
白たより梅隠のふんま

五歌やまよとれい
ほのよいらふたなほ

善見寺

くらひの有のふりや奏
の鳥のたとおろや
の丹や鯛の後戻の
夜鯉や身のこり水
或清の人たから

原憲之徒蓋ふ

於人やあらしの
入乃ののきし
二里すあま

の立や陣の舎人のあしをたし
まきいしおのりあひかき
おのりえ美し 遊女はたん
おのり心潤あ。わなありあ
日よあそびねすけりーやむきの衣
おのりやゆ所のゆきの男まさ子

とくはね

とく
黒髪をけり夕けいさるまふふ
古川やまのみの池のささけ
人おのりみえあひかき 植ねり

室八嶋

おのりしき星の海あつ夕ぬをり
みしをたを又夜のはや前所ら
尊と。舟こそをれいけりー吹
桐花ちりしれ星の表まこ
玉床や白い花さく木下周

おのり髪と誓のけり心から
板を帆や標りし青 山
関子と時合ふまきしけりあは

東海天

扇をて量りしより九折の文

病身無所用唯解ト陰晴

とわくしこけのくさく涼し外

大衆行者無諍骨壺之銘

喜々悲々一條鉄 昨日晴々今日雨

煙消し灰さきこけのまのいしな

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



